

Graham Greene 研究

—Henry James 論を手がかりに—

宮野祥子

I

最近、Graham Greene とのインタビューをまとめた対談集 *The Other Man*^(注1) が出版された。対談は1979年に行なわれ、1981年に、まずフランス語で出版された後に、英語版として出版されたものである。

9章からなる対談の内容は、作家であり、現代に生きるひとりのカトリック信者である Graham Greene の、自己認識に始まり、作家としての立場、行動する作家としての政治的関心、内政外政で紛糾する地への訪問について、そしてそのような生き方と作品とのかかわりなどが、インタビュアーの質問に、かなり率直に答えて語られている。

インタビュアーは Marie-Françoise Allain というフランスの女性である。彼女の亡くなった父親と Graham Greene が友人であった^(注2)ことから、インタビューの嫌いな彼が、それにもかかわらず応じたということである。

この対談のなかで、Graham Greene は繰り返し作家というものは観察者 <observer> であると述べ、<my aim is not to change things but to give them expression> (p. 81) と語っている。しかし同時に、作家は<神を演ずる> (p. 142) のであり、あらゆる作家は、いかに最低の作家でも、<a role vaguely comparable to God's> (p. 161) を演ずるようになる、何故なら作家は作中人物を創造し、それをほとんど完全に支配できるからであると説明し、次のような興味深い発言をしている。

I should add, though, that a writer is even more like a double agent than he is like God: he condemns and sustains his characters by turns.

(p.161)

作家と作品の関係における、そしてまた、作家として存在することの本質を語るこの〈like God〉と〈like a double agent〉とは、その世界の全体を掌中におさめている、という意味で一見同じことを言い表わしているようである。左右、善悪、というものごとの両極を支配している、そしてものごとの両極に足場を保っているという意味で、同じ立場を言い表わしているようである。しかし実は、この二通りの言いまわしの根底には、その道徳性、倫理性の有無という点で、全く違っていると考えられるのである。

〈like God〉という見方においては、作中人物たちの行動や思想が、すべて作家自身の世界観という基準に基づいて整理され、位置づけられて創造されている。従って、創作している時点での作家自身の思想からはみ出している人物は存在し得ないし、その行動の意味するところは、作家自身の倫理観、道徳観に基づいて、そのあるべきところに位置づけられるはずである。それが神のように作品を支配するということである。それに反して、〈like a double agent〉という見方においては、作家は作中人物を〈代わるがわる非難したり支持したりするのです〉という意味での道徳的態度の曖昧さがみられる。彼はさらに別のところで、作家には危険〈risk〉があることを説明して、〈小説家の持ち場は正義と不正、疑惑と明瞭の間の曖昧な国境地帯にあるのです〉、〈非良心的であらねばならぬのです、「合図があったら待ってたとばかりに変節できねばならない。彼は犠牲者の味方をする、すると犠牲者が変化するのです。」このことは作家に、信念や政治的見解に余儀なくそむかせ、良心的ではあり得なくさせます。が避けられぬことです〉(p.82)と述べている。彼は、作家が現実を観察し、表現しようとするとき、ひとつの立場を固持できない状況であることに気付いているのである。

Graham Greene の、作家は<神のようであるというよりもっと二重スパイのようである>という態度が、いかにして、いかなるところから生じているのかという点は、興味ある課題である。

本論ではこの課題を探るひとつの傍証として、Graham Greene が、宗教意識に支えられて作品を形象した作家であると考えている Henry James について、その 5 編のエッセイの中から主として 3 編を手がかりとして、Graham Greene の 1930 年代から 1950 年代の作品について考えてみたい。Henry James についてのエッセイとは、*The Religious Aspect* (1933), *The Lesson of the Master* (1935), *The Private Universe* (1936), *The Portrait of a Lady* (1947), *The Plays of Henry James* (1950) である。本論では主として、*The Religious Aspect*, *The Private Universe*, *The Portrait of a Lady* の 3 編に依って、彼が Henry James について用いた <render the highest kind of justice>, <innocence>, という表現をとりあげて、その意味するところを考察したいと思う。

Graham Greene の 1930 年代から 1950 年代にかけては、長編の作品には、*It's a Battlefield* (1934) *England Made Me* (1935), *A Gun for Sale* (1936), *Brighton Rock* (1938), *The Confidential Agent* (1939), *The Power and the Glory* (1940), *The Ministry of Fear* (1943), *The Heart of the Matter* (1948), *The End of the Affair* (1951), *The Quiet American* (1955) があり、またリベリア旅行、メキシコ旅行、第二次大戦中の外務省情報部からの西アフリカ勤務、マレー・インドシナ旅行を経て、それに伴う旅行記、或いは短編集を出版するなど、作家として精力的に活動したところである。この時期は、彼自身が折にふれて反駁している <カトリック作家> というレッテルがはられたころでもある。しかしそれはまた、彼がひとつの独自の世界を掌中におさめた作家としての地位を獲得した時期でもあったのである。

Graham Greene の Henry James への傾倒についてはすでに定説 <His most obvious masters are Henry James and Conrad> (注 3) となっており、改めて述べることもないようであるが、Henry James をとりあげることに

より、彼によって示されていた Graham Greene の理想の作家像を知りたいと思う。今でも自分と Henry James とをくモグラ塚と山>(注4)と比喻しているからには、Henry James 像は変質していないと思われる。しかしながら、自分自身をも含めて、作家をくa double agent>として言い表わす彼には、その位置づけが微妙に変化しているのではないかと思われるのである。

II

*

まず最初に、本論において扱っている3編のエッセイの内容について、その要点をまとめ、Graham Greene が Henry James のなかに読みとったことは、実は彼自身の基礎となっている人間観や運命観の反映であることを理解しておきたいと思う。

The Religious Aspect において Graham Greene は、Henry James の作品には全く宗教というものが締め出されている、という意見に対する反論から出発している。父親の Henry James から、信仰とまでいなくても宗教についての、く組織化された宗教に対する疑い>を受け継いだのは確かであること、カトリック教会のもつ <aesthetic appeal> と <emotional appeal> などが作品や書簡のなかで描かれていることを指摘している。それだけでなく Henry James の心を魅きつけたカトリックの教義があり、例えば *The Altar of the Dead* のく死者の祈り>についての描写にはそれが表われていると説明している。結局 Graham Greene は、<Surely no one so near in spirit, at any rate in this one particular, to the Catholic Church was ever so ignorant of its rules> と、その精神がきわめてカトリック教会に近づきながら、カトリック教会の守るべき規則をこれほど無視した人はいない、と判断したのである。

Henry James をカトリック教会に近づけたもう一つの要因は、超自然の

悪<supernatural evil> についてのカトリック教会の態度であったとしている。カトリック教会の説く、<evil spirit> という<this savage elementary belief> が、Henry James の、この世の悪を識る、世の中を熟知した心<sophisticated mind> に共鳴したのだ、彼の小説の世界は背信とごまかし<treachery and deceit> の世界であり、その小説は宗教意識<the religious sense> よって、その最もひどいシニシズムから救われている、つまり、美しく立派な人間と背信をなす人間の間の争いには、超自然の存在による意味<the importance of the supernatural> が与えられていると理解したのである。だから、墮地獄の可能性が与えられているのであり、その意味で背信をなす人間は卑劣ではなくなっている、と T. S. Eliot の有名な *Baudelaire* の一節^(註5) を引用しながら解説し、Henry James の描く人間の悪の背後に、カトリック的な超自然の悪を読みとったのである。

Henry James がカトリック教会の説く超自然の悪に心ひかれるようになったのは、彼の体験に裏づけされていることで、彼の体験は超自然の善は信じさせなかったが、超自然の悪は信じさせたのだと Graham Greene は理解したのである。つまり、彼の宗教は体験を映し出す鏡であって、彼の描く善なる美しい人物は単に人間でしかないが、背信をなす人間には、超自然的な力に支えられた強烈なエゴティズム—悪魔の憤り<The rage of personality is all the devil's> が表現されていると解釈したのであった。

しかし最後に彼は、Henry James の宗教意識は哲学とか信条という形はとらなかったのであって、宗教として制度化するとか、自分の思想を体系化しようとしていたと考えるのは誤りであると判断している。もし Henry James が自分の思想を体系化しようとしたならば、作品も偏ったものになったであろう、そうしなかったために、彼の小説は<their beautiful symmetry> を保っていると考えたのである。

1936年の *The Private Universe* は Graham Greene の Henry James 観の中心をなすエッセイであろう。このエッセイのなかで、彼が一番強調して

いるのは、その激しさにおいて宗教的である悪の意識 <a sense of evil religious in its intensity> である。そしてそれは、Henry James をして作品へと駆りたてる、主流をなす空想 <the ruling fantasy> であると見なしたのである。Joseph Conrad の言う芸術の定義 <art itself may be defined as a single-minded attempt to render the highest kind of justice to the visible universe> (注6) が、もし <visible> ということばが <the private vision> をも意味しうるとすれば、まさに Henry James の追い求めたことである、彼は悪に対してさえも、この最高に正しい裁きをなそうとしたのだ、それ故に、彼の思想が均整を保っており、全作品がひとつの体系としての意義が生じているのだ、と解説している。

Graham Greene によれば、Henry James の初期から後期への作品の過程において、最高の正義 <the highest kind of justice> という Henry James の眼が捉えたものは、粗略な末経験の象徴としての真実から、真実そのものへと進展をなしたのであった。それは殺人という行動で示される悪から、ひとりの存在する人物において人格化された悪 <evil in propria persona> への進歩であると判断され、社会の皮相を観察し、類型的に描く小説家であると見なされてきた Henry James を、最終的には殺人のかわりに、<the more agonizing mental violence> を描き得る小説家として認めたということである。

精神的な苦悩という悪を生み出す背景としての道徳的墮落 <corruption> を知り、それに対して最高の裁きをなすためには、作家自身のなかに <innocence> を保有しておかねばならない、つまり何か価値あるものを裏切っているということを、常に作家の内部で意識していなくてはならない、と Graham Greene は述べている。それは作品に現われる人物は、裏切る者も裏切られる者も、作者の中に根づいていなくてはならない、ということでもある。さらに彼は、この裏切りの対称となる無垢の作中人物 <these centres of innocence> は、ほとんど女性として設定されていることを指摘し、彼女たちを <the points of purity in the dark picture>、暗黒の悪の世界に存在する純潔 <無垢> という構図で捉えていたのである。

この善悪の意識の背後にあるもの、換言すればその意識を生ぜしめる源として、Graham Greene は、Henry James の身近に実在した人々をあげている。<the points of purity>のイメージとしては、彼の愛していた、いこの Mary Temple, 24歳で病死したこの女性の存在をあげ、彼の悪の意識、つまり彼の激しい人間性に対する不信については、例をあげて説明しながら、家族から受け継いだ遺産であると判断を下したのである。そして、彼の家族的背景に関心をもつのも、彼が最高の裁きを下そうと注意深く取り扱っている、眼に見える世界のその像が彼の幼ない時期に決定されたからだ、とその理由を述べている。

しかしながら、Henry James は本質的には芸術家であり、リアリストであって、悪の意識を強迫観念としてもっていたわけではなく、ただ彼の観察した世界に最高の裁きを下そうと願っただけなのだ、彼はリアリストだから、この世におけるエゴティズムの勝利を、そしてまた、地獄に落された魂が鎖につながれていることを示さねばならなかったのだ、としている。最後に、Graham Greene は、Henry James の小説の究極の美点<the final beauty>は、彼が非難する悪に対して憐れみ<pity>を感じている点にあると述べている。彼の作中人物のなかで、最も惨めな人物、最も墮落した人物に対しても憐れみを感じさせることのできる分析の完璧さ、憐れみの公平さ<the final justice of pity>において、Henry James は、詩の歴史における Shakespeare と同様に、小説の歴史において孤高の存在であると評価したのである。

The Portrait of a Lady (1947) は、Henry James の同名の作品についてのエッセイである。ここで Graham Greene が最終的に語っているのは、<Judas Complex>と呼ぶところの裏切りというテーマである。

まず彼は、この作品のプロットが、若い女性が運命に敢然と立ち向う、という機械仕掛け<machinery>の趣向にすぎず、その内容は、財産目当ての求婚者、良心のかけらもないその情婦、愛のない結婚という網に捕えられた若いアメリカの女相続人、に要約されるとしている。そして主人公

の Isabel Archer は、背信の夫に生涯縛りつけられたままで小説は終わっていることを指摘して、この終り方によって、死以外に裏切りから逃れる出口はなく、パッピーエンディングの可能性などまったくありはしない、と Henry James は言いたいのだと彼は判断したのである。作者は読者にひとつの定理を提出し、読者はその x が出口なし <no-way-out> であると発見する、しかしそれも Henry James の作風の魅力の一部である、と Graham Greene はいうのである。

この出口なしの物語で、彼が指摘しているのは、Henry James の最も関心のあること、すなわち、彼の作品を支配する情熱は、裏切りの観念 <the idea of treachery>、ユダ・コンプレックスであり、若い Henry James の心に、このように深く、どうして裏切りという意識が印象づけられたのか、その理由はわからないとしながらも、彼はこの理由を Mary Temple の死に求めている。そして Henry James が、生涯をかけて忍耐強く誠実に、この亡き女性を描き続けたことを思うと、彼の眼を、人間の存在に内在する失望、希望の裏切られることに開かせたのは、たったひとつの死ではなかったか、と推測したのであった。

**

1945年の *François Mauriac* において、Graham Greene が Henry James についてなした発言 <with the death of James the religious sense was lost to the English novel, and with the religious sense went the sense of the importance of the human act> (注7) とともに、上述の Henry James 観が Graham Greene の人間観の特徴を言い表わすひとつのチャンスにもなっている、と思われるのである。

F. O. Matthiessen は、これらの Graham Greene の Henry James に対する見解について、<グレアム・グリーンは、自分自身の深刻な悪の意識に基づいて、ジェイムズの「経験は彼に超自然的な悪の存在を信じさせたが、超自然的な善の存在は信じさせなかった」と書いた> (注8) と述べ、Graham Greene のあげるその証拠をいくら重視しても行き過ぎではない、

と判断している。ただし、彼は Henry James について、<不死の根拠を彼は美的観念論の精髓に求め>「私に考えうる最高の善」とジェイムズが主張する意識は、倫理的な価値観に貫かれているとはいえ、<精神の領域に属する意識であった>(注9)と、霊的、宗教的というよりは、倫理的な精神的意識の強い作家であると評している。

F. O. Matthiessen も指摘する Graham Greene の悪の意識は、*The Lost Childhood* (1947) に語られている彼自身の人間観、運命観の根底にある意識である。このエッセイは、14歳頃までの、彼の書物との出会いを通して、それまで白紙であった少年の心が、人間について、人生について、運命について、いかに染められたのか、ということについて、43歳の彼がおとなのことばで表現したものである。つまり、43歳のいま、自分の出発点と、現在の自分についての再確認をしたものだとも言えるのである。その冒頭で彼は、いみじくも、おとなは新しく出会う書物のなかに、すでに自分の心のなかに在るものだけを確認しがちな傾向がある、と述べている。

少年の彼が、書物から導き出し、現実であると納得した、人間観、運命観は次のようなことばで表現されている。憶病、恥辱、ごまかし、失望、友情の裏切り、不名誉、美と悪とをかねそなえた悪の天才、人間性は白(善)と黒(悪)ではなく、黒と灰色であること、悪の勝利の瞬間にのしかかる滅亡の運命、ユダの裏切りなどが、Greene 少年の白紙の心を染めた人間の現実であった。彼はそれらが、人間を見るひとつのパターンとして、自分のなかに定着しているのを認めている。それは<perfect evil walking the world where perfect good can never walk again, and only the pendulum ensures that after all in the end justice is done>であって、これが後に宗教によって確認されたのだと述べている。この世には全き善はなく、あるのは極悪のみ、ただ運命によって、最後には正義が行なわれると確信させられる、という認識は、この世の人間の基本的要素として悪を意識している、という意味で、彼が Henry James の作品に読みとった人間観と等しいと思われるのである。

III

1930年代から1950年代にかけての Graham Greene の作品、つまり1929年の処女作以来、いわゆる〈カトリック作家〉としての地位を獲得した時期を理解するために、ひとつの手がかりとして、Graham Greene の Henry James 観との関連を、〈render the highest kind of justice〉と〈innocence〉ということばを中心にして考察したいと思う。

*

Graham Greene が Joseph Conrad のことばを借りて、Henry Jamesは、彼の眼に映った世界に対して、特に悪に対してさえも、最高の裁きを下すのだと言うとき、それは〈justice〉という物差しで世界を計り、そのなかに住むさまざまな人間、或いは現象が、その物差しの尺度によって、あるべき位置に定められることを言い表わしているのだと考えられる。この場合〈justice〉の本質は何であるのか、何による〈justice〉であるのかが問われるべきである。すでに述べたように、Graham Greene は、それが Henry James のカトリックへの共鳴は認められるが、ドグマは無視した宗教意識、とりわけ悪の意識だというのである。しかしそれは、作品の中の葛藤を、その善悪の基準が解いて整理をして、世界を秩序あるものへとするという意味ではない。作品の世界の創造者である作者自身が、何が善であり何が悪であるかを強烈に意識していた、ということなのである。その意識に基づいて、作中人物に性格が与えられ生かされ、その在るべき場所と役割が作品の世界において与えられ、プロットを通して〈corruption〉が明らかになるのである。このような理解の仕方は、〈小説家は、あらゆる人間のうちで、最も神に似ている。彼は神の模倣者である〉という書き出しで始められている、François Mauriac の〈小説論〉^(注10)のなかで述べられている、Marcel Proust についての意見、〈道徳的展望の欠除が、プルーストによって創造された人間を貧しくし、その宇宙を狭めているのである〉

(注11)という意見と同じ文学観によるものである。

Graham Greene によれば、Henry James のこの宗教意識があるからこそ、彼の小説のどん底のシニシズムが救われている (*The Religious Aspect*) と判断されている。それは人の姿をとった憤りという、人間の墮地獄の可能性を示す、悪魔の力の表われ <The rage of personality is all the devil's> (*The Religious Aspect*) として理解されているのである。彼にとっては Henry James は、このような肉体と成った悪の勝利と、その魂の孤絶とを、その視点 <the highest kind of justice> に基づいて描いた小説家であったのである。

Henry James の作品を解説する <render the highest kind of justice> という発想に依る構造は、1930年代から1950年代にかけての Graham Greene の作品にも見い出されるのである。彼のこの時代の代表的な作品は、*Brighton Rock*, *The Power and the Glory*, *The Heart of the Matter*, *The End of the Affair* である。これらの作品に共通しているのは、Henry James の作品と同じく、作中人物の性格の設定が明確であるという点である。*The End of the Affair* の Sarah をのぞいて、他のほとんどの作中人物は、与えられた性格、役割、立場が明白で典型的であり、最後までそれは変っていない。Sarah にしても、彼女の変貌を可能ならしめる人間的な苦悩が作品の意図であって (そうでなければこの作品は成立しないから)、作者の思うがままに配置されている。

Graham Greene が悪を描くとき、例えば *Brighton Rock* の Pinkie も *The Heart of the Matter* の Scobie も *The Power and the Glory* の whisky priest も、自分が、カトリックで言う悪の立場に立つことを自覚している。そしてそのことがその人物たちの大前提となっているのである。Henry James の場合は、そのすさまじい人間の悪は、エゴティズムに動かされてゆくプロットに織り込まれていて、いつか人間関係の隙間から滲み出るようである。例えば、*The Golden Bowl* の Charlotte Stant とか *The Portrait of a Lady* の Mme Merle の場合のように。これはカトリック信者である Graham Greene と、そうではない Henry James の違いであるのかも知れない。

この点について、例えば *The Portrait of a Lady* の結末の扱い方と Graham Greene のそれとを比較してみたい。II章で述べたように、この作品の最後で、裏切られた Isabel Archer は卑劣な夫 Osmond と生涯暮らすであろう、という暗示のままで終わっていることについて、作者も Isabel を見捨てて、出口なしの世界を描いたのだと解説されていたのである。一方、Graham Greene の場合は先述の4作品において、主人公の死後、必ずカトリックの神父が登場する章を設定し、カトリックの世界観という大きな枠組の中にその死を組み込ませているのである。つまり主人公の死で作品が終るのではなく、その後の章が加えられることで彼の意図した世界が初めて完成されるのだと判断されねばならないのである。これは当時の Graham Greene がドグマに対して柔軟性に欠けていたということかも知れないが、*The Other Man* で、François Mauriac を <an example not to follow> (p. 82) であると言い、その理由として、神学的に良心的でありすぎると述べているのは興味深いことである。

**

もうひとつ、Henry James の Graham Greene への影響、或いは共通点として、彼が Henry James の作品に読みとった <innocence> について述べてみたいと思う。

彼は、Henry James が墮落の世界 <corruption> に正しい裁きを下すためには、Henry James 自身のなかに <innocence> を保っていなくてはならないと述べているところがある。

For to render the highest justice to corruption you must retain your innocence: you have to be conscious all the time within yourself of treachery to something valuable. If Peter Quint is to be rooted in you, so must the child his ghost corrupts: if Osmond, Isabel Archer too. These centres of innocence, these objects of treachery, are nearly always women: ... Isabel Archer... Nanda, ... Milly Theale, ... Maggie Verver, ... Maisie... These are

the points of purity in the dark picture.

(*The Private Universe*)

ここで<innocence>を、何か価値あるものに背信を犯しているという意識と対称させているところに、Graham Greene が解釈した<innocence>の特徴がある。つまり彼は <innocence> を、裏切りの対称となる純な無垢の人物のタイプを表わすことばとして用いているのである。それは換言すれば、墮落の深みに住む人物と対立する無垢の人物<these centres of innocence> という構図で作品を捉えることである。従ってこの人物たちは、暗黒の人間世界における純潔そのもの<the points of purity>という、性格上否定的な側面をもたない、責められることのない人物像として、彼には受けとめられているのである。

さらに、このような無垢の人物のイメージのモデルとして、彼は従妹の Mary Temple をあげ (*The Portrait of a Lady*)、そのイメージは<青春における優雅で魅力的で幸せなものすべての象徴>、<人生によって裏切られるすべてのものの象徴>であると述べている。そして、無垢の作中人物に伴なうこのイメージに与えられている、人生に潜む裏切りという意識については、Mary Temple の死によって開眼したのではないかと推測したのである。

...when we remember how patiently and faithfully throughout his life he drew the portrait of one young woman who died, one wonders whether it was just simply a death that opened his eyes to the inherent disappointment of existence, the betrayal of hope. (*The Portrait of a Lady*)

<innocence>であることが、裏切りというかたちで人生の新しい局面を受けとめること、或いは、人生や人間存在そのものに内在する裏切りとして潜んでいる失望を知ることは、1941年のエッセイ *Herbert Read* においてすでに考察したところである^(注12)。Graham Greene は、Herbert Read についても、人間は裏切りという意識を伴って、新しく人生に眼が開か

れ、同時に自己認識をせねばならないことについて語っていたのである。

ところで Graham Greene は <innocence>、その象徴としての <子供> ということばを用いたり、或いはそのような性格をもった人物を形象しているが、1935年の *England Made Me* の Anthony Farrant^(注13)以後、しばしば見出しされることである。それは *Brighton Rock* の Rose, *The Confidential Agent* の Else と Rose Cullen, *The Ministry of Fear* の Anna Hilfe, *The Heart of the Matter* の Helen Rolt, *The End of the Affair* の Sarah を経て、*The Living Room* の Rose にいたる女性像についての大きな特徴になっているのである。

それぞれの作品における特殊性はあるけれども、Sarah をのぞいて、これらの女性像は、主人公との関わりの過程において <innocence> のイメージをもつ女性として描出されている。彼女たちはそれぞれ善人であったり、主人公に害を与えない、人を裏切らない女性であったり、逆に守られ、庇われねばならない女性であったりするのである。

Brighton Rock の Rose は Pinkie の <evil> と対称する <good> を終始持ち続け、Henry James の裏切られる女性像そのものである。Else と Rose Cullen, Anna Hilfe も多少の性格のニュアンスは違っているけれども、だいたいところで Rose と同様に善意の女性として描出されている。

さらにもう一つの特徴は、Henry James と異って、この女性たちは、主人公の視線が捉えた女性像であるという点にある。*Brighton Rock* の Rose は別として、Else, Rose Cullen, Anna Hilfe は主人公の眼に映った姿が語られている。Hellen Rolt も同様の性格に設定されていて、彼女もまた、守らねばならない子供として提示されているのであるが、その姿は、Scobie の憐憫の眼の網の目にすくい取られた幻である。だから結局 Scobie に対して <運命の女性> の役割を演じた Hellen は、最後に無知な子供ではなく、ひとりの女性として成熟への可能性を秘めた姿を現わすのである。したがって、Scobie を破滅へと導びく <運命の女性> としての、秘められた裏切りの可能性も、実は彼の眼が映した幻影としての <無垢> の所産なのである。この Hellen と同じ役割が、すでに与えられていたのが、*A Gun for*

Sale (1936) の Ann である(注14)。

主人公との関わりにおける役割としての<innocence>が、*The End of the Affair* の Sarah には、主体的に生きるひとりの女性として具現されているようである。この作品も Bendrix が語る Sarah と、Sarah の日記によって語られる彼女の内面との両方をあわせて、初めてその実像を知ることができるようになっていく。彼女は時の観念のもたらず不安に縛られていない子供のような存在であり、夫以外の恋人をもつことについての罪意識の欠如という点でも<innocence>の女性である(注15)。そして、彼女の行動におけるひとつのポイントは、Bendrix への愛の最高の表現である彼女と神との約束を、彼女が守るべく純粋であればあるほど、彼の心に猜疑心と激しい苦悩をもたらすというパラドックスが成立している、と見ることもできるという点にある。それは、恋人の生命の甦りを賭けて、彼を諦めるという彼女の愛の決断から生じている。つまり彼女を彼女たらしめている、彼女が選んだ生き方(愛)に内在する逆説である。

ここには、これまでのような人物像のひとつのタイプとしての<innocence>からの展開が認められるのである。それは<innocence>そのものに内在する新しい発見があった、その結果<innocence>を単純に一面的に見ることができなくなった、ということではないだろうか。これまでの女性像に形象されていた、肯定的人間、善悪における善を志向する純なるものとしての<innocence>に新しい要素が加わった、ということである。それはどのように純粋であれ、この世の人間として存在するかぎり、必ず人間の行動は矛盾する否定的な意味を内包せざるを得ないということであるのかも知れない。

この新しい要素が *The Quiet American* における Pyle について、語り手 Fowler に<Innocence is a kind of insanity>と言わしめたものではないだろうか。Pyle の善意と無知についての、この Fowler の発言の背後には、<innocence>に内在する原始的な野蛮性という人間の文明と対立する有

害な属性が認められる^(注16)のである。それは Graham Greene がアフリカの原始の密林に認めた野生としての原初のエネルギー^(注17)と同質であろう。この原初的なエネルギー、文明と対立する力としての<innocence>によって、これまで作品のなかで認められてきた<innocence>の倫理的価値が失われてしまった、と言っても過言ではないかも知れない。<innocence>が人間存在においては否定的な要素をもつものである、という発見は、人間において善なるものと認めてきたものの価値を疑わせることである。つまり、善悪の基準が不明瞭になることである。

対談集 *The Other Man* のなかで、*The Quiet American* の次作の長編である *A Burnt-Out Case* (1961) について、Graham Greene は<This book marked a turning-point in my work, and in it I think I succeeded, as I told you, in breaking the pattern in the carpet>(p. 64) と語っている。文脈によれば<the pattern in the carpet> (Henry James のことば) とは、彼の基本的な人間観を意味しており、II章で取り上げた *The Lost Childhood* で語られている<perfect evil walking the world where perfect good can never walk again, and only the pendulum ensures that after all in the end justice is done>のことである。これは Marjorie Bowen の *The Viper of Milan* という作品によって彼の心に定着したものであった。ただし、この発言は V. S. Pritchett, Elizabeth Bowen と共に、影響を与えられた作品を質問された時、Pritchett が Chekhov と Turgenev を、Bowen が Henry James の名をあげるだろうと、Graham Greene は故意に Marjorie Bowen, Rider Haggard, Stanley Weyman の作品をあげたのだ、と説明されている。(pp. 61-62) 従ってことば通りには受けとめることはできないかも知れない。

だが、すくなくとも *A Burnt-Out Case* において、それまでの<the pattern in the carpet>を毀すことに成功したと意識されているのであるから、この時期に、彼の人間観、世界観の変貌の可能性があるということは確かであろう。

IV

1章において述べたように、*The Other Man* において Graham Greene が言うところの、作家が<神のようである>ことと、<二重スパイのようである>ことの差違を、そしてそれがどのようにして生じているのかを知るための、ひとつの手がかりを求めるのが、この論の目的であった。そのために1930年代から1950年代にかけての彼の前半期の作品の特徴を、理想とする作家 Henry James に、彼が読みとった特色とを比較検討してみることによって、その変化の可能性を考えるための示唆が与えられたのである。

<a double agent>への傾向と、その意味するところは、今後 *A Burnt-Out Case* (1961) 以後の作品を考察することによって、確かめられなくてはならないことである。ただ1961年を基点として、作家としての Graham Greene に何か新しいことが生じ始めたのだ、と言い得るのではないだろうか。それが本質的な変化であるのか、それとも、これまでの人間観や世界観がさらに徹底して、深められることによる変化であるのかを知ることは、今後の課題である。そういった意味で、彼の語る<My way of grappling with human nature has little to do with Catholicism; it derives from my experience of life, from what I can observe>, <For me, the sinner and the saint can meet; there is no discontinuity, no rupture. I believe in reversibility>, <But the basic element I admire in Christianity is its sense of moral failure> (p. 163) という最近のことばは興味深いのである。

* * * * *

使用テキストは *Collected Essays*, Penguin Books, 1970 である。

注

1. *The Other Man*-Conversation with Graham Greene by Marie-Françoise Allain, translated by Guido Waldman, The Bodley Head, 1983

2. *ibid.* Prologue and Dedication, p. 9
3. *Contemporary Novelists*, ed by James Vinson, McMillan, 1982
4. *ibid.* p. 145.
5. It is true to say that the glory of man is his capacity for salvation; it is also true to say that his glory is his capacity for damnation. The worst that can be said of most of our malefactors, from statesmen to thieves, is that they are not men enough to be damned. *Selected Essays*, Faber and Faber, 1961, p. 429.
6. *The Nigger of the 'Narcissus'* (1897) の序文の冒頭, A work that aspires, however humbly, to the condition of art should carry its justification in every line. And art itself may be defined as a single-minded attempt to render the highest kind of justice to the visible universe, by bringing to light the truth, manifold and one, underlying its every aspect.
7. *ibid.* p. 91.
8. F. O. マシーセン著, 青木次生訳「ヘンリー・ジェイムズ」研究社, 昭和 47, pp. 154-155.
9. *ibid.* p. 164.
10. F. モーリャック著, 川口 篤訳「小説家と作中人物」ダヴィッド社, 昭和 43, p. 7.
11. *ibid.*, p. 42.
12. *This Stock of Innocence*, 「英米文学研究」第18号, 梅光女学院大学英米文学会, 1982, 参照。
13. *Innocence of Anthony Farrant—2—*「英米文学研究」第14号, 梅光女学院大学英米文学会, 1978, 参照。
14. 以上述べた女性像は, 下記の論において考察したものである。
ふたりの Rose—その 1, その 2, その 3—, 「英米文学研究」第15, 16, 17号, 梅光女学院大学英米文学会, 1979—1981
15. セアラの愛, 「文学における宗教」佐藤泰正編, 笠間書院, 1979. 参照。
16. *The Quiet American II* 「英米文学研究」第11号, 梅光女学院大学英米文学会, 1975. 参照。
17. *Innocence of Anthony Farrant—1—*「英米文学研究」第13号, 梅光女学院大学英米文学会, 1977, 参照。

本文中の訳文については, 前川祐一訳「失われた幼年時代」南雲堂, 1974, を参照いたしました。